

國府理の捉え方

中村 史子 (愛知県美術館学芸員)

夭逝の芸術家、といった言い回しがある。年若くてして亡くなった作家のことである。彼らの生み出した作品は、往々にして、その死が目前に迫っているからこそ、よりいっそう切実で美しく見える。

それでは、國府理もそんな夭逝の作家の1人なのだろうか。私個人は、ちょっとそうじゃないように思う。

なぜなら、そんな芸術家神話へと彼の活動をまとめてしまうと、あまりにも人間的な彼の所作振る舞いの数々が抜け落ちてしまう気がするからだ。例えば、早朝の搬入作業後、休憩用の控え室を自主的に掃除して帰っていったこと。そんな作家を、彼以外、私は知らない。

そして、それ以上に、彼の作品には死の陰りがほとんど見られないためだ。彼の作品はいつも、人間中心的世界観からちょっと離れた場所へと向かっていた。けれどもそれは、人間の滅亡等を直接的に予感させるものではなかったはずだ。彼の作品を安易に死と結び付けて語ることは、きっとそれほど生産的ではない。

そういうわけで、私は彼を夭逝の芸術家、という風には受け取っていない。きっと、普通に、21世紀初頭に活躍した優れた造形作家の1人、という捉え方がふさわしいのだろう。